

辺野古通信

第46号 2015年5月22日



5/17 沖縄県民大会に 35000 人超(那覇市内)

発行 沖縄の自立解放闘争に連帯し、反安保を闘う連続講座(沖縄講座@横浜)
沖縄講座 HP <http://www.7b.biglobe.ne.jp/~okinawa-koza/>

日米両政府は沖縄の声を聞け！ 辺野古埋立を阻止せよ！

■4/17 の翁長・安倍会談は、日米首脳会談の「手土産」、沖縄との「対話」のポーズ、という政権の見え透いた意図を超えて、沖縄の民意とその歴史的正当性を日本政府に突きつける場となった。安倍官邸が、発言の順序を入れ替え、翁長知事の発言中に報道陣を締め出すという小手先の策を弄したが、翁長知事の発信力を押し止める効果はなかった。そのことは沖縄地元紙だけでなく全国紙の世論調査で政府の「辺野古移設」方針に否定的な声が賛成を上回ったことにも示されている。会談を前後して、翁長知事が経済交流の訪問団の一員として中国、台湾を訪問して活発な自治体外交を展開していることも見逃せない。アジアの中の沖縄が日米両政府に向き合う構図だ。安倍との会談で翁長知事は「沖縄から見ると、米軍基地の運用について日本政府がほとんど口を挟めないことをよく知っているから、辺野古の問題は県民と米軍、県民と米国政府の問題だという実感がある。」と痛烈に皮肉り、米政府と直接交渉することを宣言した。■しかし安倍政権は事態の深刻さを理解することができない。4/27 の日米安全保障協議会「2プラス2」、28 日の日米首脳会談で「辺野古が唯一の選択肢」を再確認し、日米軍事一体化を飛躍的に深化させる「日米ガイドラインの見直し」に合意した。安倍は「辺野古移設を唯一の解決策とする立場は揺るぎない。」と強い決意を示し、日米同盟を「民主主義、法の支配、人権、自由を尊ぶ価値観を共有する」「希望の同盟」と

持ち上げた。民意を踏みにじられ続ける沖縄は全く視野の外にある。■5/5 米国防安全保障協力局は MV22 オスプレイ 17 機と関連装備を約 3600 億円で日本に売却する方針を通知した。1 機当たり 30 億から 50 億円が相場と言われる輸送機を 200 億円超の高値で売りつけられたのだ。配備先とされる佐賀県知事は「白紙」と言明しており、配備先さえ決まっていない。5/12 には米空軍横田基地に CV22 オスプレイ 10 機の配備が発表された。嘉手納配備が予定されていたのが横田に変わったことで「沖縄の負担軽減」と嘯いているが、とんでもない。配備される米空軍特殊作戦部隊の実働部隊は米空軍嘉手納基地と米陸軍トリイ通信施設に配置されており、沖縄の北部訓練場で訓練する可能性が高い。海兵隊仕様の MV22 オスプレイの 3 倍も事故率が高いという空軍仕様の CV22 オスプレイが沖縄と首都圏、全国の上空を飛び回る。5/18 ハワイで米海兵隊 MV22 オスプレイが墜落し 20 名を超える死傷者が出た。普天間や横田の市街地の事故を想像するとぞっとする。翁長知事の飛行中止要請を無視して、事故の翌日から普天間の MV22 オスプレイは訓練を始めた。ハワイの事故の原因は不明のまま。■沖縄では 5/17 県民大会を 3.5 万人超の結集で成功させ 5/24 から 5/26 まで東京要請行動を展開。5/27 から翁長知事は訪米要請行動に出発する。

■辺野古・高江カンパは累計 1,741,166 円(5月20日現在)。引続きカンパを！
郵便 00210-O-2021 沖縄連続講座

5.24 国会包囲ヒューマンチェーンへ！

■日 時：5月24日(日) 14時 国会周辺



5/15 から 18 日まで沖縄に行ってきた。

県民大会当日もゲート前で警察が市民を拘束！

梅雨入りが遅れ、炎天下で 30 度近くまで気温が上がる。台風を避けるために 5/10 からスパッド台船、クレーン付台船は引き上げられている。リーフに白波が立つ状態が続き、私たちの滞在中は海上での作業はなかった。

シュワブのゲート前が緊張するのは、海保関係車両がゲートから入る早朝だ。海上で暴力的弾圧をやめない海保を簡単に通すわけにはいかない。毎朝、抗議する市民とそれを排除する県警機動隊の介入でもみ合いになる。17 日の県民大会当日、早朝のもみ合いで一人の青年がゲートの中に連行された。屈強な警察官に押さえ込まれる様子が見えた。幸い 10 分程度で青年を取り戻すことができた。辺野古新基地建設に向けた日米国家権力の強い意志を感じる瞬間だ。

県民大会—会場から溢れ出る人人人

シュワブゲートの早朝行動に参加してから、早めに那覇市内に移動し大会会場のセルラースタジアムに着いたのは 10 時半すぎ。長い行列が出来ていて、開場時間の 11 時になってもなかなか進まない。とにかく暑さもあって会場周辺の熱気ムンムン。にこやかな会話が飛び交う。

12 時前から、KEN 子さんの軽妙な司会でオープニングコンサート。スタジアムの座席はみるみる埋まっていく。舞台に最初に登場したのは、おもろ保存会の古典音楽。荘重な音色が青空に向かって響き渡る。そして辺野古の陸と海で毎日行動しているゲート前とカヌー隊辺野古ブルーメンバー約 20 名が登壇すると早くも会場は大盛り上り。「沖縄の未来は沖縄が拓く」の文字の入った大きなプラカードを掲げながら、「座り込め、ここへ」「沖縄 いまこそ立ち上がろう」（闘病中の山城博治さん作詞）を熱唱。会場全体から大合唱が沸き起こった。

13 時の開会時間が迫る頃には内野席と通路、グラウンドの椅子席が人で埋まり、溢れた人々が外野の芝生席に誘導され、人で埋まっていく。



大会は普天間高校 1 年生の宮城りなさんの司会で始まった。「私は世界一危険な小学校で学んできました。学びの場まで脅かす基地はもう要りません。」宮城さんがそう切り出すと、大きな拍手。共同代表 5 人の挨拶から始まり翁長知事まで、どの発言もウチナーグチが混じり、印象に残るものだった。ここでは辺野古現地を代表して登壇した安次富浩へり基地反対協共同代表の発言を書き留めておきたい。安次富さんは「日本は法治国家だ」と語る菅官房長官は、普天間基地を「放置」してきた「放置主義だ」と喝破し、「**沖縄の基地は私たちに任せて欲しい。沖縄の基地は私たちが撤去させる。もう日本政府には任せられない。これが自己決定権だ。沖縄の未来は私たちが決める。そしてこの闘いは絶対に勝てる。**」と結んだ。

辺野古の海と陸の〈闘いの現場〉が主役

大会実行委員会事務局長の仲宗根悟県議は「ゲート前や海上は毎日緊張、緊迫の連続だ。現場に足を運び、共に行動を！」と行動提起した。主催者発表の 35000 人はどう見ても控えめな数字だ。4~50000 人はいたのではないかな。会場にたどり着けなかった人の話もたくさん聞いた。

今回の県民大会の大きな特徴は、辺野古の闘いの現場—海と陸での行動こそが重要だという徹底した「現場主義」が貫かれていたことだ。それは発言者の言葉の端々に表現されていた。県議・市議・首長が率先して現地行動への参加を呼びかける。現場の抵抗闘争と直結する代表制民主主義。残念ながらヤマトでは想像すらできないが、これが沖縄の現在の抵抗の水準だ。

翁長知事は「どうか日本の独立は神話だと言われなように、安倍首相、頑張ってください」と日本政府を痛烈に皮肉った。もちろんこの皮肉はヤマトの私たちにも向けられている。「ウチナーンチュ、ウシェーティーナイビランドー（沖縄人をないがしろにしてはいけませんよ）」—スタンディングオベーションで応える万余の人々の熱気の中で翁長知事の結びのウチナーグチが、地鳴りのようにこだましていた。

宮古・八重山諸島の軍事要塞化を許すな！

日米首脳会談で米オバマ政権の「お墨付き」を得た安倍政権は、宮古・八重山諸島の軍事要塞化も一挙に進めようとしている。5月9日に初めて翁長知事との会談に臨んだ中谷防衛相は、沖縄の基地過重負担の解消という普天間問題の原点を忘れたかのように、中国の脅威に対抗する八重山諸島の軍事要塞化計画を得々と説明した。11日には防衛省の左藤副大臣が宮古島・石垣島を訪れて市長と会談、陸自警備部隊、ミサイル部隊配備、着上陸訓練場整備などを打診した。安倍政権は、あくまで沖縄の民意を踏み潰してさらなる軍事要塞化を進め、沖縄を恒久的な日米の軍事植民地として固定化しようというのだ。

与那国島のこれから（主催：沖縄一坪反戦地主会関東ブロック）

★お話し：崎元俊男さん（与那国町議会議員）

5月31日（日）14時台東区生涯学習センター407号

宮古島に陸自配備打診

防衛副大臣 700〜800人規模

【宮古島・八重山】防衛省の左藤副大臣は11日、宮古島市下地町で記者会見を開き、宮古島に陸自部隊の配備について、防衛省が打診した。左藤氏は、宮古島市長と会談した際、陸自部隊の配備について、防衛省が打診したと述べた。左藤氏は、宮古島市長と会談した際、陸自部隊の配備について、防衛省が打診したと述べた。左藤氏は、宮古島市長と会談した際、陸自部隊の配備について、防衛省が打診したと述べた。

地元合意は不透明

【宮古島・八重山】防衛省の左藤副大臣は11日、宮古島市下地町で記者会見を開き、宮古島に陸自部隊の配備について、防衛省が打診した。左藤氏は、宮古島市長と会談した際、陸自部隊の配備について、防衛省が打診したと述べた。左藤氏は、宮古島市長と会談した際、陸自部隊の配備について、防衛省が打診したと述べた。左藤氏は、宮古島市長と会談した際、陸自部隊の配備について、防衛省が打診したと述べた。

4.26渋谷サウンドデモに1000人！



4月26日の日曜日、東京・渋谷と原宿の繁華街を、辺野古新基地建設反対のサウンドデモが駆け抜けた！5月24日の国会包囲ヒューマンチェーンのプレイベントとして企画された若者とサウンド主体のアクションは、予想以上に参加者が集まり、約1000人が「辺野古の海を埋め立てるな！」「ジュゴンの海を守れ！」の声を、日曜日の渋谷と原宿の大群衆の中に轟かせた。

16時に宮下公園に集合。沖縄出身者からの激しいアピールを受けて、サウンドカー先頭にデモ出発。参加者がどんどん膨らんだ。



前段の集会で沖縄の「島ぐるみ会議」のカンパが呼びかけられ、8万以上が集まった。カンパは現地へ送金される。このサウンドデモは、4月27日の沖縄タイムスで写真付きで紹介された（上の写真）。

<4.28>シンポジウム

敗戦70年の日本と沖縄/アジア

4/25 東京・全水道会館で開かれた〈4.28〉シンポは約140人参加。仲里効さん、崔真碩さん、丸川哲史さんが「敗戦70年の日本と沖縄/アジア」のテーマを巡って3時間あまりの緊張感あふれる討論。

冒頭、辺野古の映像「速報・辺野古のたたかい2015年1月〜3月」が流れた。主催者からシンポを企画した経緯と狙いが話された後、三人の出席者が登壇。第一部では仲里効さんが「戦後なき沖縄と敗戦70年 リヴァイアサン国家からの離脱、”阿Q=X”へ」と題して基調講演。崔真碩さんが「影の東アジアから一日本の滅亡について」、丸川さんが「世界史の中の東アジア」と題して発言した。

休憩を挟んで第二部では丸川さんがコーディネーターとなり会場からの質問に答え、相互討論した。（全記録は雑誌情況7月号に掲載予定。）

続いて辺野古の安次富浩へり基地反対協共同代表からシンポに宛てたメッセージが、辺野古現地に通う学生によって読み上げられた。安次富浩さんからの「沈黙は敗北につながる。道路に出て怒りの声をあげよう！」という檄を受けて、シンポ実行委員会から、辺野古新基地建設反対・集团的自衛権法制化阻止・原発再稼働阻止・日韓連帯集会など4月5月6月の具体的な行動への参加が呼びかけられた。（次頁に基調講演の概要）



仲里効さん基調講演『戦後なき沖縄と敗戦70年』（要旨）

仲里効さんの基調講演の論点は多岐にわたる。①サンフランシスコ体制の構造分析②沖縄の主体意識の変革③自同律の畏から構成的闘争/「独立」を発明することの三点に絞って紹介する。文責はすべて編集部にある。

主権を二重化し戦後国体と天皇制を維持したサ体制

論点①について。仲里さんは、「日本の領土問題は 1952 年のサンフランシスコ体制に構造的に埋め込まれている」と指摘し、サンフランシスコ条約第二章「領域」が二条と三条に分かれていることに注意を促した。第二条は (a)「朝鮮処理」から (f)「南沙及び西沙諸島処理」まで 6 項に分かれ、日本国家が「権利、権原及び請求権を放棄する」と記されている。しかし「放棄する」対象と主体の問題が曖昧にされている。例えば (a)「朝鮮」は当時分断され、二つの国家に分かれていた。(b) も二つの中国が存在していた。誰に対して「放棄する」のか、書いていない。ここに仲里さんは「冷戦構造を喰らいながら戦略的に東アジアというものを組織し直していく」というアメリカの戦略的な狙いを見る。そして「このことが現在の領土問題を規定する淵源になっている。」と強調する。しかし第三条で規定されている「北緯 29 度以南の南西諸島」などは第二条のように「権利、権原及び請求権を放棄する」という形になっていない。「信託統治制度」が提案され可決されるまですべての権力をアメリカが握っていくという構造になっている。「つまり沖縄を“宙吊り”にすることによって戦略的に活用していく。」もう一つ第三条成立の原点には「天皇メッセージ」がある。「日本には潜在主権がある」という形で主権を二重化していく。二重化することによってリバイアサン国家を変形し戦後の国体と天皇制を維持していく。第三条をこのように読み解きながら、仲里さんは「このサンフランシスコ体制の構造が、現在の沖縄と日本政府の対峙の内実に投影されている。改めて日本の戦後 70 年とは何だったのか、問わざるを得ない。」と指摘した。

沖縄の主体意識の変革—抵抗の起点は 1995 年

次に論点②について。仲里さんは、「自己決定権の確立」まで登り詰めた現在の沖縄の抵抗の水準の起点を 1995 年に求める。米兵による少女レイプ事件をきっかけに「復帰」とは何であったのか、沖縄の戦後とは何であったのか。さらに遡って沖縄の近代史とは何であったのかを問い返ししながら、沖縄の歴史意識を練成していく作業が、民衆の中から起こっていく。その象徴的な発言が、1995 年 10 月 21 日に 85000 人を集めて開かれた県民大会での大田昌秀知事と高校三年生の言葉だ。大田知事は挨拶の冒頭で「行政として真っ先に守るべき子供たちの尊厳を守れなかったことを率直にお詫びしたい」と「謝罪」した。これに対して高校生は、沖縄の復帰後の風景を当たり前の前提として見てき

た。その当たり前の前提を少女暴行事件によって改めて考え直すきっかけとなったことを語り、「次の悲しい出来事を生み出すこと」への拒否、加害者にも被害者にもなることをきっぱりと拒否すると宣言している。さらに「今の沖縄はだれのものでもなく、沖縄の人のものだから」とも発言している。つまり、1995 年がその後の 20 年間の沖縄の抵抗の質を決した、現在の沖縄の抵抗の原点となっている。大田昌秀さんという、鉄血勤皇隊として戦時動員された戦争体験を持つ世代と高校三年生という復帰後世代が改めて出会い直していく。この出会い直しの中から沖縄の抵抗が立ち上がっていく光景を、ここに見ることができる。仲里さんは、その後大田県政が「基地返還アクションプログラム」「国際都市形成構想」で沖縄の自立を表現していったことに触れ、「沖縄戦を体験した世代と復帰後世代が出会い直しを通じて沖縄の自立を紡ぎ出していった。」と指摘した。



リバイアサン国家を内破する新たな〈主体〉の発明へ

最後に論点③について。自己決定権の思想を突き詰めていけば、どうなるか。「リバイアサン国家からの離脱を考えざるを得ない。主権の持つ唯一性が、領土問題で前面に出される。そうではなく、ナショナリズムではないパトリオティズム、群島と半島・島と海と岬の思想を対置する。〈歴史〉を召喚すると言う意味では、日本の侵略と植民地主義、リバイアサン国家を内破する論理を組み立てていく。」ここでは「国民」ではない〈主体〉の発明が必要となる。そのイメージとして仲里さんが紹介したのは、ハンナ・アーレントの「パーリアとしてのユダヤ人」の「パーリア」というあり方、川満信一さんの琉球共和社会憲法案の 11 条に基づいて孫歌さんが表明した「琉球共和社会住民」という自己規定、川満さんと一緒に反復帰論の論者として琉球共和国憲法 F 案を提案した仲宗根勇さんの、国民ではない「困民」というあり方、崔さんの言う朝鮮の言葉で「ヒト」を意味する「サラム」、丸川さんの「阿 Q=X」だ。仲里さんは「国民国家、国民という主体、つまりリバイアサンに内属するような〈主体〉のあり方ではなく、リバイアサンを内側から破っていく新たな〈主体〉を発明していくことが重要だ。」と強調し、「沖縄が国家を獲得するということは、自同律の畏、リバイアサン国家に内属することになる。そうではない、構成的闘争、国家ではない共同体のあり方というものを我々が「阿 Q=X」として提示できるのか。これからも共に考えていきたい。」と結んだ。

